

〔短 報〕

“ふれあい”を通して母子相互作用を促す 看護介入プログラムの評価

—出産後1～4か月の母子を対象として—

前原 邦江* 森 恵美*

Evaluation of the “*Fureai*” nursing program to promote
mother–infant interactions through touch
—For mothers and infants at 1–4 month after birth—

Kunie MAEHARA*, Emi MORI*

要 旨

本研究は、出産後1～4か月の母子を対象に“ふれあい”を通して母子相互作用を促す看護介入プログラムを実施し、評価することを目的とした。2つの病院で参加募集を行い、趣旨説明の後、研究参加に同意した者を参加者とした。本看護介入プログラムは、(a)インファントマッサージの手法を用いた“ふれあい”の実習と(b)グループディスカッションで構成される。3～5組の小グループ制で、1回あたり2時間程度、計4回のクラスである。データ収集は、①プログラム参加前後の2時点で無記名の自記式質問紙調査を行った。②プログラム実施中の母子のふれあい場面を録画し、行動観察を行った。母子18組を分析対象とした。質問紙調査の結果、介入前に比べて介入後は「赤ちゃんがどんなことが好きで、どんなことが嫌いかわかる」とする回答が有意に増加し ($p < 0.01$)、「おろおろして、どうしていいかわからない時がある」とする回答が有意に減少した ($p < 0.01$)。また、「赤ちゃんにたくさん話しかけるようになった」、「よく観察するようになった」、「赤ちゃんと接するのが楽しい」等の意見があった。母子の行動観察の結果、プログラム回数を重ねる毎に母親の子どもへの語りかけと非言語的コミュニケーションの頻度が増加したケースがあった。今後は、対象者数を増やし、母親の認識と行動の両面から、本看護介入の効果を検証することが課題である。

Key Words：母子相互作用，育児，母親，乳児，看護介入

I. 緒 言

日本では、おんぶや添い寝のように親子が生活の中で自然に触れ合う子育てが行われてきた¹⁾。しかし、現代の親たちは過去に乳児と接した経験が少なく、「赤ちゃんにどう接したらよいかわからない。」といった子どもとのコミュニケーション上の困難が育児不安の一因となっている。わが子との相互作用の経験は母親役割の自信と相互作用の楽しみに関わっており²⁾、母子相互作用が効果的に行われるよう援助することは、産褥期の母親役割獲得を促す上でも有効である^{3),4)}。“ふれあ

い”の場面は母子相互作用が引き出されやすく、母親の自信と楽しみを高める看護介入の好機と考えられる。そこで、本研究は、出産後の母子を対象に“ふれあい”を通して母子相互作用を促す看護介入プログラムを実施し、評価することを目的とした。

II. 研究方法

1. 対象

出産後1～4か月の母親と乳児。2つの病院の産科病棟・外来でパンフレットを配布または掲示し、参加者を募集した。研究の趣旨説明の後、同意した者を参加者とした。

*千葉大学看護学部

*School of Nursing, Chiba University

2. 看護介入プログラム

本看護介入の目的は、先行研究の看護介入モデル（図1）²⁻⁴⁾に基づき(a)母子相互作用を促すことにより、母親の自信を高め、相互作用の楽しみを増大させること、(b)ピアサポートの活用である。プログラムは、(a)インファントマッサージ⁵⁾の手法を用いた“ふれあい”の実習と(b)グループディスカッションである。3～5組の小グループ制で、1回あたり2時間程度、計4回である。なお、この時期の乳児は安静覚醒状態が短く、実習は全員が同時に行えない場合があるため、3回で全ての内容を網羅するように構成し、1回は復習および予備日とした。助産師および国際インファントマッサージ協会⁶⁾公認インストラクターである1名の研究者が、研究者の所属する看護学部「家族支援室」⁷⁾で看護介入を実施した。7組の母子を対象にパイロットスタディーを行い、プログラムの運営方法等を検討した。

3. データ収集方法

1) 質問紙法

プログラム開始前（介入前）と第4回目終了後（介入後）の2時点で、無記名の自記式質問紙を配布し、回収箱および郵送法で回収した。質問紙には背景要因（子どもの月齢、過去の乳児の世話経験など）と、次の①～④が含まれる。【 】内に看護介入モデル（図1）に対応する概念を示す。
 ①母親の自己評価：【合図のよみとり】は「赤ちゃんがなぜ泣いたり、むずがったりしているかわかる」、「私は、赤ちゃんがどんなことが好きで、どんなことが嫌いかがわかる」の2項目、【要求への応答】は「赤ちゃんが声や動作でお話しようとする時、私も声やタッチで返事をする」、「私は赤ちゃんが喜ぶことをしてあげられる」の2項目、【相互作用の楽しみ】は、鈴宮らの研究⁸⁾を参考にした「赤ちゃんの世話を楽しみながらしている」1項目である。他に、鈴宮らの研究⁸⁾を参考にした「おろおろして、どうしてよいかわからないこ

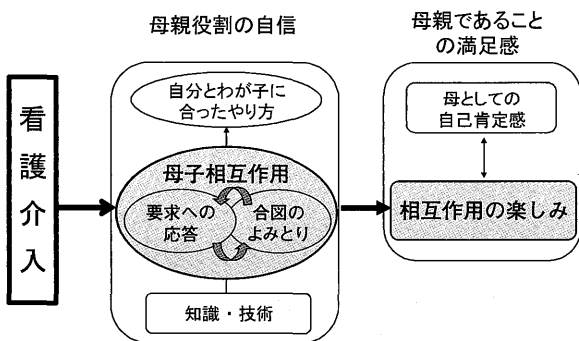


図1：看護介入モデル

とがある」、子どもの育てやすさの受けとめを表す自作の項目「私の赤ちゃんは、思ったよりも、手がかかる」を加えた。4件法で回答するものである。②母親が認識した参加後の母子の変化：「赤ちゃんマッサージを始めてから、赤ちゃんとあなたに、どんな変化がありましたか？」の質問に自由記述で回答するものである。また、③プログラム参加の満足度（5段階）、④終了後の感想・意見（自由記述）を尋ねた。

2) 観察法

室内の前方の隅に固定カメラを配置し、参加者の承諾を得てプログラム中の母子のふれあい場面を撮影した。⑤録画した映像・音声データを用いて各ケースの行動コーディングを行い、【母子相互作用】における母親の行動を評価した。1名の研究者が看護介入者として参加観察し記述したフィールドノートと⑤から効果的な看護援助について考察した。

4. 倫理的配慮

研究者の所属する大学の倫理審査委員会の承認を受けた。参加者には、研究の趣旨と方法、匿名性と自由意思の保証、研究者が助産師として本プログラムを実施すること、ビデオ映像の取り扱いに関する配慮等について説明し、参加者と研究者が共に同意書に署名した。アンケートは返送をもって同意とみなし、ケース番号で対象者を識別した。

III. 結 果

1. 対象者の概要

平成17年6月～平成18年5月に本プログラムに参加した22組のうち、3回以上の出席があり、質問紙への有効回答が得られた母子18組を分析対象とした（表1）。

表1：対象者の概要

n = 18 (人, %)

対 象 児	月 齢 (開始時)	1 か月	7 (38.9)
		2 か月	6 (33.3)
		3 か月	3 (16.7)
		4 か月	2 (11.1)
出 生 順 位	第1子	12 (66.7)	
	第2～3子	6 (33.3)	
出 生 時 体 重 (g)	平均3174.6 ± 442.0 (範囲2000～4176)		
母 親	年 齢 (歳)	平均32.6 ± 4.3 (範囲26～41)	
	乳児の世話経験*)	なし	11 (91.7)

*) 第1子の母親のみ回答。

2. 母親の自己評価

1) 介入前後の母親の自己評価の変化

①介入前後の母親の自己評価に関する項目への回答をクロス集計した。介入前に比べて介入後は、「赤ちゃんがどんなことが好きで、どんなことが嫌いかわかる」とする回答が有意に増加し (Kendallのタウ b, $p < 0.05$) (図2), 「おろおろして、どうしていいかわからない時がある」とする回答が有意に減少した ($p < 0.01$) (図3)。

第1子の母親 (11名) に対象を限定してクロス集計 (Kendallのタウ b) した結果, 介入前に比べて介入後は, 「赤ちゃんの喜ぶことをしてあげられる」 ($p < 0.05$), 「赤ちゃんの世話を楽しみながらしている」 ($p < 0.01$) とする回答が有意に増加し, 「おろおろして、どうしていいかわからない時がある」とする回答が有意に減少した ($p < 0.05$)。

2) 母親が認識した参加後の変化

②母親自身が認識した参加後の変化は, 「全身をよく観察するようになった.」, 「小さな反応に気づくようになった.」のように子どものサイン

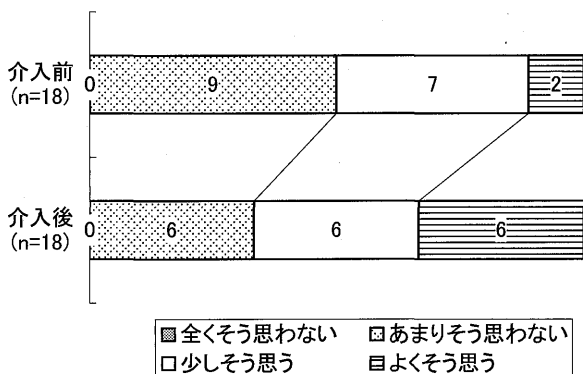


図2：介入前後の母親の自己評価

「赤ちゃんがどんなことが好きで、どんなことが嫌いかわかる」への回答

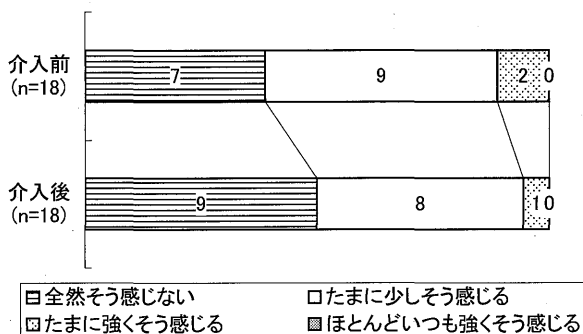


図3：介入前後の母親の自己評価

「おろおろして、どうしていいかわからない時がある」への回答

への感性が高まったことや, 「赤ちゃんにたくさん話しかけるようになった.」, 「ゆったり向き合う時間ができた.」, 「意識して触れるようになった.」等, 子どもへの働きかけやコミュニケーションの活性化を示す記述があった。また, 「子どもの喜ぶ顔が見たくて.」, 「(子どもが笑うのを) 見て楽しい.」, 「より愛おしく感じる.」等の子どもへの愛着や相互作用の楽しみが表現されていた。

母親が認識した子どもの変化は, 「身体をのびのびしてマッサージを受けるように.」, 「体に触れられる楽しさがわかり.」, 「うれしそうな顔をみる.」, 「目を見て笑うようになった.」, 「声を出すようになった.」等, 母親の働きかけに対する子どもの肯定的な反応を表す記述が12件あった。また, 「ウンチがスムーズに出ようになった.」5件, 「スーッと寝るようになった.」4件などの生理的な効果を実感しているケースがあった。

3. ケースAの自己評価・行動の変化と看護援助

今回, 介入効果が顕著に認められたケースA (第1子, 生後2か月) の事例について, プログラム開始前から終了後の母親の自己評価の変化, 行動 (発話, 非言語的コミュニケーション) の変化と, それに影響したと考えられる看護援助を抽出した。

1) ケースAの自己評価の変化

ケースAは, 介入前は, ①自己評価として, 育児不安を表す「子どもを育てていて, どうしたらよいか, わからなくなることがある」に「よくそう思う」と回答し, 合図のよみとりと要求への応答の自信を表す項目「赤ちゃんがなぜ泣いているかわかる」, 「赤ちゃんが喜ぶことをしてあげられる」には「あまりそう思わない」, 「全くそう思わない」と回答していた。介入後は, 育児不安の項目には「あまりそう思わない」となり, 合図のよみとりと要求への応答の自信の項目は「少しそう思う」となった。また, ②参加後の自分自身の変化として, 「赤ちゃんと接するのが楽しい. 以前は触るのが怖かった.」と記述していた。

2) ケースAの行動の変化

⑤ケースAの母子の行動コーディングを行い, (i)母親から子どもへの発話と(ii)母親から子どもへの非言語的コミュニケーションの頻度と内容を分析した。各ケースの観察条件を一定にするため, インファントマッサージ実習の中から同じ手技を選定し, 分析場面とした。母子の自然で自発的なやりとりを観察するため, プログラム1回目は分析場面から除外した。ケースAのプログラム2～

4 回目の分析場面は平均16.5分間であった。

(i) 発話

母親の子どもに対する発話数を10分あたりに換算した値を図4のグラフに示す。ケースAの発話の総数は、プログラム2回目(6.17)よりも、3回目(10.91)、4回目(12.33)と回数を重ねるごとに増加した。発話の内容を「代弁」(例。「気持ちいいの↓」,「～だね」),「語り・問いかけ」(例。「こっちだよ」,「どうしたの?」),「かけ声」(例。「ほら」,「〇〇(子どもの名前)ちゃん」)等に分類してみると、ケースAは、「代弁」がプログラム2回目(1.76)よりも、3回目(3.12)、4回目(3.58)に増加した。

(ii) 非言語的コミュニケーション

母親の子どもに対する非言語的コミュニケーション行動を「(マッサージ以外に)子どもの身体に触れる」(例。頭をなでる,ポンポンと身体にタッチする),「(大げさな)表情で働きかける」(例。笑いかける,目や口を大きく開いて見せる),「(子どもと目を合わせるように)顔を見る」に分類した。10分あたりの行動の発生数を図5のグラフに示す。非言語的コミュニケーション行動の総数は、プログラム2回目(5.29)よりも、3回目(11.69)、4回目(17.09)と回数を重ねる

ごとに増加した。ケースAは、「身体に触れる」行動がプログラム2回目(1.76)よりも、3回目(2.34)、4回目(9.14)に増加した。

3) ケースAの行動に影響した看護援助

2)の分析場面において、本看護介入プログラムの中から、ケースAの母親の行動に影響したと考えられる一つ一つの具体的な看護援助〈 〉を抽出した。〈子どもへの語りかけのモデリング〉により、A母親は、それを模倣して、A児に触れる時に語りかける行動が認められた。〈子どもの反応を描写して気づきを促す〉,〈子どものよい反応をフィードバックする〉ことにより、A母親は、A児と目を合わせて笑いかける行動が認められた。また、プログラム4回目には、グループ内の他の母子と同調してA児に語りかけることや、お互いの子どもの反応に関心を示し見守る様子が観察された。

4. プログラムの評価

1) 満足度

③プログラム全体の満足度を「とても満足」～「不満」の5段階評価で尋ねた結果、「とても満足」が17名(94.4%),「満足」が1名(5.6%)であった。

2) プログラムへの意見・要望

④「このプログラムに参加して良かったこと」(自由記述)の内容は、「同じ悩みをもつお母さんが多いと感じ」、「お母さん同士の情報を聞けたり」、「友達ができた。」,「ちょっとした不安や疑問が(話すことで)なくなった。」等、ピアサポートの活用を挙げたものが15件あった。また、上の子や父親を含めた家族関係の親密化を述べたものもあった。その他に、「雰囲気やゆったりとしていて居心地がよかった。」,「私が癒された感じ。」,「赤ちゃんと出かけて」、「こうした時間が持てる所がほしい。」等、母親自身がゆったりと安心して過ごせる場を求める声が寄せられた。「不安なことを相談できる。」,「話を聞いてもらえる。」等の専門家の相談・助言へのニーズがあり、「別の機会にも参加したい。」と継続的な支援への要望があった。

(発話数/10min.)

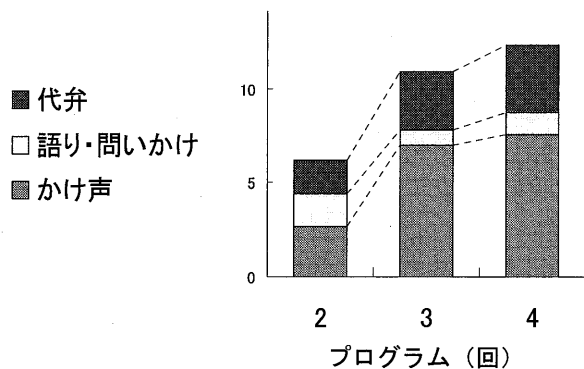


図4：発話 (ケースA)

(発生数/10min.)

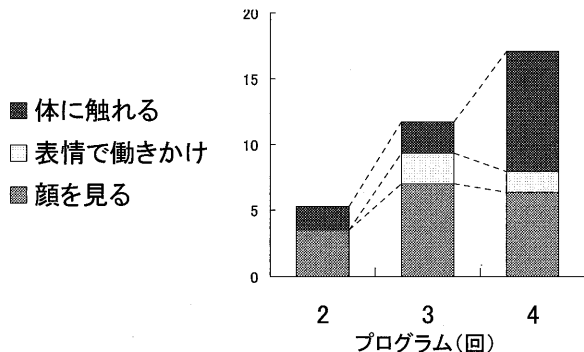


図5：非言語的コミュニケーション (ケースA)

IV. 考 察

母親の自己評価の結果は、わが子の要求をよみとり世話行動をする自信が高まったことを示唆している。特に、第1子の母親では、子どもへの応答の自信と相互作用の楽しみが増大した。また、母親自身がそれらの変化を具体的に自覚しており、子どもの変化を実感したケースも多かった。

Goldberg⁹⁾は、親としての能力感は、子どもとの相互作用からの親の自己評価であると述べている。“ふれあい”を通して子どもの良い反応を実際に体験することで、母親は自分の世話行動に自信がもて、子どもとの関わりを楽しむことができたと思われる。(図1)第1子の母親では「母の育児経験が乏しく子の欲求を適切に満たしてやれないため、子の不快な反応に戸惑い、育児への不安や緊張が強まる関係」¹⁰⁾に陥っているケースも多いと思われる。“ふれあい”の実習を通して〈子どもの反応を描写して気づきを促す〉、〈子どものよい反応をフィードバックする〉看護援助により、「母子相互関係を整える」¹⁰⁾ことに役立つと考えられるだろう。ケースAの事例検討の結果を見ると、プログラムの回数を重ねるごとに母子のコミュニケーションが促進されたことが行動観察によって明らかになった。ケースAは、単に子どもへの発話と非言語的コミュニケーション行動の数が増加しただけではなく、子どもの感情や行為を解釈し共感を示す「代弁」や「身体に触れる」という相互的な働きかけが表れており、子どもの合図への敏感性と母子相互作用が促されたことが示唆された。これは母親の自己評価とも一致している。3か月児をもつ母親を対象とした斉藤らの研究¹¹⁾では、タッチケアは子どもの発達にマイナスに影響する「母から子への関わり」の低さや「状態不安」の高さを抑制する効果が認められている。ケースAは、赤ちゃんへの接し方がわからず不安が高いという第1子の母親の典型的な事例であり、“ふれあい”の実習を用いて母子相互作用を促す看護介入の有用性が示唆されたと言えよう。本研究の対象は生後1～2か月児が主であり、睡眠-覚醒リズムや授乳時間が不規則であることや、子どもの反応は身体的・気質的特徴や環境・状況による影響を受けやすいため、集団のクラスの中で母親が子どもからの肯定的な反応を体験できない場合もある。したがって、看護介入を行う際には、子どもの状態や母親の達成度をアセスメントし、効果的な介入となるように配慮することが必須である。また、母子相互作用の表れ方は個別性が高く、様々な影響要因が関連するため、介入の評価には各々のケースについて検討することが必要であろう。今後は対象者数を増やし、母親の認識と行動の両面から本看護介入の効果を検討することが課題である。

本プログラム参加者の満足度は高く、“ふれあい”の実習に加えて、ピアサポートの活用が有用であることが示された。母親同士の情報交換や交

流により育児不安の軽減に役立つという意見が多かった。母子相互作用の促進は個別性の高い看護援助であるが、それを小グループで実施することにより、参加者相互のモデリングやサポート形成の効果が期待できる。母親同士が実習という体験を共有し、お互いの子どもの成長を見守り、その人なりのやり方を認め合うことができる場をつくることが求められる。

謝 辞

参加者の皆様をはじめ、協力施設の関係者の皆様に感謝致します。本研究は千葉大学21世紀COEプログラム平成17～18年度特別研究奨励費の助成を受けた。

引用・参考文献

- 1) 勝浦クック範子：日本の子育てアメリカの子育て 子育ての原点を求めて。第1版，サイエンス社，1991。
- 2) 前原邦江：産褥期の母親役割獲得過程—母子相互作用の経験を通して母親役割の自信を獲得していくプロセス—。日本母性看護学会誌，5(1)，31-37，2005。
- 3) 前原邦江：産褥期の母親役割獲得過程を促す看護介入—母子相互作用に焦点をあてて—。日本母性看護学会誌，5(1)，38-45，2005。
- 4) 前原邦江：産褥期の母親役割獲得過程を促進する看護に関する研究—母子相互作用に焦点をあてた看護介入の効果—。母性衛生，47(1)，43-51，2006。
- 5) ヴィマラ・マクルアー（草間裕子訳）：インファントマッサージ ママの手大好き。第1版，春秋社，2001。
- 6) 国際インファントマッサージ協会日本支部のホームページ <http://www.iaim-jp.com>（アクセス日：平成19年1月5日）
- 7) 家族支援室のホームページ <http://www.chiba-u-21coe.jp/maehara>（アクセス日：平成19年1月5日）
- 8) 鈴宮寛子，山下洋，吉田敬子：保健機関が実施する母子訪問対象者の産後うつ病全国多施設調査。厚生学の指標，51(10)，1-5，2004。
- 9) Goldberg S.：Social Competence in infancy: A model of parent-infant interaction, Merrill-Parmer Quarterly of Behavior and Development. 23, 163-177, 1977.
- 10) 河野洋子：産褥期の母子相互関係と看護の構造（第2報）—育児に関する看護過程の分析—。

母性衛生, 42(2), 418-426, 2001.
11) 齊藤和恵, 吉川ゆき子, 飯野孝一, ほか: 3
か月児への6か月間のタッチケア施行の効果—

健常児の発達と母親の育児感情の変化—. 小児
保健研究, 61(2), 271-279, 2002.